

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01156

研究課題名（和文）現代日本における都市空間管理の新たな権力形態に関する研究

研究課題名（英文）New formation of controlling power over urban space in contemporary Japan

研究代表者

森 正人 (mori, masato)

三重大学・人文学部・教授

研究者番号：10372541

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：英語圏において展開するポスト人間中心主義の議論に、日本において展開するデジタル技術を用いた都市の管理を理論的に位置付けた。とくに、東京オリンピック・パラリンピックに際して行われた都市空間のデジタル技術的管理の可能性を、ポスト人間中心主義や機械論から論じることができた。研究成果は、2020、2021、2023年の人文地理学会大会にて発表した。また、『文化地理学講義』『古地図で楽しむ瀬戸内・香川』を刊行し、2024年に刊行する『誰が場所をつくるのか』の原稿も完成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、英語圏において2000年代に蓄積されてきたポスト人間中心主義の研究、それと関連しながら2010年前後に盛んに議論されるようになった都市空間のデジタル的管理に対する批判研究を日本において導入することに高い学術的意義を持つ。しかも、そうした理論的動向の整理を行いながら、オリンピック開催や万博招致といったメガ・イベントに注目し、新たな都市統治の形態が出現していることを明らかにすることができた。とりわけ、肯定的に評価されるスマートシティなどの都市のデジタル的管理を批判的に検討することで、人間と機械、人間とデジタルとの関係が空間的に現れる議論を日本において展開したことは、大きな意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：I situated current condition of development of digital technologies for urban space controlling in Japan into "post-humanism" account actively discussed in Anglophone humanities. In particular this research project focuses on how urban space of Tokyo had been digitalised for Olympic and Paralympic of 2020 in Tokyo, and examined it in a academic context of post-humanism and machine theories. The research was presented three times in academic meeting of Jimbun Chiri Gakkai: 2020, 2021 and 2023. The research was published as books: Bunka Chirigaku Kogi in 2021, Kochizu de Tanoshimu Setouchi Kagawa in 2023. I also completed writing of a book which will be published in July of 2024.

研究分野：文化地理学

キーワード：都市空間 ポスト人間中心主義 デジタル 物質性 集合体

1. 研究開始当初の背景

本研究が具体的な研究対象とするのは、2000年代、デジタル技術の進展に伴い、世界中で都市の再開発の具体的な形として登場した「スマートシティ」という都市形態である。これはAI(人工知能)をはじめとするデジタル技術によって基礎インフラと生活インフラ・サービスを効率的に管理・運営し、環境に配慮しながら、人々の生活の質を高め、継続的な経済発展を目的とした新しい都市であり、その人間を介在させない「賢い」管理形態は、都市工学や環境工学などで高く評価されている。

こうした空間管理は人間社会に対して権力を行使する。人文地理学的研究は、スマートシティの否定的側面として二つの問題を提起できると考えた。

第一に、都市の新たな権力形態によると空間からの特定の人間の排除の問題がある。都市権力による人間の排除は、「ジェントリフィケーション」として地理学で問題化されてきた。しかし、昨今のスマートシティは「客観的」なデジタル解析によって都市空間を管理するシステムをアップデートし続ける。そして空間内にいる人間の動きを予測し、調整する。犯罪者、テロリストの蓋然性があると判断された人間はそこにはいることができなかつたり、その中で自由に活動できなかつたりする。しかしその客観的な管理は、最初に誰かによってプログラミングされており、決して客観的なものではない。こうした非人間的な都市空間の権力性を問うことで、現代の都市空間におけるデジタル的な権力形態が明らかになる。

第二に、人間と事物との関係についての問題がある。これまでの研究においては人間が人間を管理すると想定されてきた。しかし、スマートシティというデジタル的都市空間では人間が事物として管理されている。スマートシティにおけるこうしたデジタルと人間との関係を、2000年代の人文地理学において盛んに議論されるようになった「ポスト人間中心主義」という問題関心と関連づけて論じる。ポスト人間中心主義では、主体である人間を自律的な存在と見なすのではなく、自然・動物・機械などによって常に刺激され、変容していくものとする。スマートシティにおいてはとりわけ複雑な機械=人間関係が表れている。それゆえ、ポスト人間中心主義的な枠組みで都市空間の管理を批判的に捉えることで、人間と機械との複雑な関係性を見ることが出来る。

2. 研究の目的

本研究は、次の三点を明らかにすることを目的にした。上記の英語圏を中心になされている都市空間のデジタル的管理、スマートシティの議論を整理、日本の東京および大阪周辺における都市空間のデジタル的管理の過程と現況、それによって、現代の都市を統治する権力の様態、海外のスマートシティとの比較をとおした日本の特性、とりわけメガ・イベントとの関係。この目的には、次の二点の独自性がある。第一にスマートシティに端的に表れる都市空間のデジタル的管理に対して批判的な視点を提示する。第二に2000年代以降の英語圏の地理学で議論されるポスト人間中心主義や都市の管理という視点からスマートシティについて議論を行う。

3. 研究の方法

本研究は英語圏における学史・方法論的整理、東京都および大阪府周辺での都市におけるデジタル化の資料収集および現地調査を行った。

については、本研究を人文地理学史の中に正確に位置づけるために必要な作業である。英語圏の人文科学全般におけるポスト人間中心主義および、スマートシティや都市のデジタル管理に関する著書や論文を収集し、整理することが必要だと考えた。

については、東京オリンピック・パラリンピック、万国博覧会の開催、さらにカジノ施設の建設等のメガ・イベントに向けた都市再整備の中でどのようにデジタル技術を採用しているのか、新聞記事など文献資料の収集のほか、現地調査やヒアリングをとおして明らかにする。

4. 研究成果

本研究は、申請時には海外のスマートシティを訪れて現地調査を行い、東京オリンピック・パラリンピックにおいても調査を行う予定であった。しかし、調査初年の2020年、新型コロナウイルスの感染拡大にともない、海外調査と国内の実地調査が不可能となった。そのため、調査対象と方法の見直しが必要になった。

海外での調査の代わりに、2020年度からデジタルと空間に関連する洋書や英語論文の収集のほか、より幅広い理論的背景としてポストヒューマニズムに注目し、その理論的展開を理解することとした。新型コロナウイルスの感染拡大はその後社会的な脅威となり、出張をとまなう調査は勤務大学によって「不要不急」とされたため2021、22年度も実施が困難であった。とりわけ、2021年に延期された東京オリンピック・パラリンピックについて、東京での実地調査が不可能となった。そのため、東京オリンピック・パラリンピックの社会的表象の分析を行うことに、研

究内容を移行した。この社会的表象の分析のため、関西学院大学図書館において、新聞記事の収集、雑誌記事の収集を行った。

また、ポストヒューマニズムの理論的展開とともに、それを日本の地理学会において紹介し、さらに研究者に限定されない一般人への社会的還元のために、収集し把握した理論的動向とそこからの展開を分かりやすい形で執筆することにした。このために、2020～22年度にかけては主に実地調査をとまなわない研究を行った。2023年度は最終年度であり、この3年間の調査内容を整理し、書籍にまとめた。

こうした調査研究は、2020、21、23年度に人文地理学会大会で発表し、学会に還元をした。そのタイトルは次のとおりである。

2020年度 粘的多孔性と文化の地理（オンライン開催）

2021年度 オメラスを立ち去る人と、地存在論と、文化地理学において「地」を考えることの意味とは何か（オンライン開催）

2023年度 地理的集合体としての人間＝機械（法政大学、11月26日）

また、次の書籍を刊行することで、広く社会に研究内容を還元した。

『文化地理学講義 「地理」の発見からポスト人間中心主義まで』（新曜社、2021年）

『古地図で楽しむ瀬戸内・香川』（風媒社、2023年）

さらに、次の書籍を執筆し、研究年度終了後に書籍として刊行した。

『誰が場所をつくるのか ポストヒューマニズム的試論』（新曜社、2024年）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森 正人
2. 発表標題 コメント：コミュニケーションとコンピューテーション 英語圏人文地理学におけるデジタル地理学の展開
3. 学会等名 日本地理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森 正人
2. 発表標題 オメラスを去る人と、地存在論と
3. 学会等名 人文地理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森 正人
2. 発表標題 粘的多孔性と文化の地理
3. 学会等名 人文地理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森正人
2. 発表標題 地理的集合体としての人間－機械
3. 学会等名 人文地理学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 森 正人	4. 発行年 2023年
2. 出版社 風媒社	5. 総ページ数 187
3. 書名 古地図で楽しむ瀬戸内・香川	

1. 著者名 森正人	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 296
3. 書名 文化地理学講義 「地理」の発見からポスト人間中心主義まで	

1. 著者名 森正人・中川正	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ	5. 総ページ数 208
3. 書名 文化地理学ガイダンス [改訂版]	

1. 著者名 森正人	4. 発行年 2024年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 352
3. 書名 誰が場所をつくるのか ポストヒューマニズム的試論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------